

ドラマセラピーの実践・研究・手法

虐待を受けた子どもへのドラマセラピー その2

尾上 明代

前号に続き、「発展的変容 (Developmental Transformation)」という手法を用いて実施された、虐待を受けた子どもとの長期セッションについて、米国のドラマセラピスト・James、Forrester、Kim の3人の研究論文 (2005) から紹介する。この手法で実施されたセラピーの報告は多くあるが、その中でも特に手法の意義がよくわかる事例として、古典の一つとみなしたい実践である。

セラピー開始後から半年ほどが経ったころ、ジャマーが、とうとうセラピストが強い怪獣の役になることを許すようになったことを前号の後半で記した。セラピストは、ジャマーが逃げ込む場所を事前に作ったり、怪獣の動きを止めることができる (想像上の) フリーズガンなどを渡しておくなど、創造的な仕掛けで、ジャマーが興奮しすぎたり解離してしまわないよう工夫を凝らしながらプロセスを進めていった。

チームでより良いプロセスを作る

そのうちに、ジャマーはセラピストを穴や押し入れに閉じ込める場面を創り始めた。そういうときの彼のエネルギーはとて高く、だんだんと自分の性虐待のテーマに「象徴的な距離」から近づいてきたのが、セラピストに認識されたという。ジャマーは相変わらず強い役のみに一体感を感じていた。弱くて小さい傷ついた役に自分を重ねることはなかったのだ。またセラピストが負った傷の世話をする役の中では、彼は感情的距離をとりながら「傷つくとはどういうことか」をセラピストに教えているように思われた。

セラピーを進める一方で、セラピストは里親のシャーリーに性虐待を受けた子どもについての心理教育も実施した。ジャマーの回復を阻止する一番大きな問題は、近くに住む加害者 (叔父) に、ジャマーが朝の登校時に会う環境であること、また夕方、帰宅時にシャーリーがジャマーと彼の実の両親の家の前を

通る際、両親が2人をじろじろ見ることだった。そんな夜は、ジャマーは決まっておねしょをした。シャーリーは、出来ることはすべてやりたいと考え、加害者となるべく会わないように、ジャマーを転校させた。その夏、ジャマーはあるキャンプに参加することができ、そこでは、自分が「問題児」ではないという認識を得ることができた。学校側の理解と協力も欠かせなかったであろう。学校や里親も一緒にチームとなって、与えられた状況の中で最善を尽くしているのがわかる。さらにシャーリーはその環境からジャマーを出してあげたいと、家を買うためのローンに申し込んだ。引っ越しの準備ができたころには、おねしょは減っていったのだった。シャーリーは喜んだ。たとえおねしょをしたとしても怒鳴らないで対応するなど、より良い子育てができるようになり、またジャマーも期待に応じて頑張った。セラピーが始まって9ヶ月経ったころには、セラピストやシャーリーたちへのジャマーの信頼は増していた。同時に「チャッキー」が出てくる悪夢を見ることもなくなり、朝まで1人で眠ることができるようになったのである。

目隠しゲームとヒーローインタビュー

このころジャマーは、あるゲームを創り、セッションでそればかり行うようになる。セラピストだけが目をつぶって、ジャマーを捕まえようとするゲームである。目を開けているジャマーを捕まえることは当然無理なので、ジャマーが必ず勝ち、セラピストをバカにする。

ここでまた、そのセラピストの創造的なアイデアが生まれる。セラピストはテレビのアナウンサー役になり、ゲームに勝ったジャマーに「ヒーローインタビュー」をしたのだ。これはジャマーのお気に入りとなり、その後何度も行われた「インタビュー」の中で、彼は世界の飢餓、正義などについても語り初め、ゲームで戦う両陣営も、白人 VS 黒人、男子 VS 女子、先生 VS 生徒、そして被害者 VS 加害者、というふうに進展していった。

あるセッションで、セラピストは、目を閉じてジャマーが自分に近づく音をじっと聞き耳をたてているとき気づいたことがあった。「これは、加害者が虐待をしに来るのを、ジャマーが寝たふりをしてじっとしていたときの状態だ。ジャマーは、それを自分に教えているのだ」と。つまり、ジャマーが無意識のうちに作って遊んだこのゲームは、彼が恐怖とともに暗闇の中で、加害者が来るのを察知しながらじっとしていたときのことが象徴的に表現されたものだったのだと思う。そのゲームで毎回ジャマーが勝ち、セラピストをバカにして恥をかかせるという行為も、ジャマー自身が加害者からされていたことの再現であろう。明らかにジャマーは、加害者と自分を同一視していたことになる。

そこで、セラピストはジャマーに、セッション中、自分が見られたくないときは「透明人間になれるボタン」を押してよい、というルールを提案した。もちろん、ジャマーはこれを大変気に入った。すかさずセラピストは、「叔父さんが来たとき、透明人間になれたら良かったね」と話しかけると、ジャマーはうなずいた。さらに「ベッドでのおねしょは、叔父さんを遠ざけるのには良いアイデアだったと思うよ」と言うと、ジャマーはセラピストをじーっと見つめてから「うん」と答えた。ここのフェイズの転換は非常に重要である。今までの象徴的な行為の意味を子どもに伝える段階に一举に突入したという感じがする。このタイミングを決して逃さずに、理解をクライアントと共有する判断が素晴らしい。しかし、全面的な現実における語りかけではなく、現実を含んだ象徴的行為を続行しながら、つまりプレイスペースでの架空空間を保ちながら、ドラマ=象徴の意味を確認している。ジャマーにとっては、自分に非があると信じていた「おねしょ」が肯定的に受けとめられ、かつ加害者への自分の戦略を褒められた瞬間であったと思う。

そこでセラピストは、「インタビュー」の場で想像のマイクをもち、次のようにアナウンスした。「少年少女の皆さん、自分の叔父さんから虐待を受けたすべての子どもの代表として、ジャマーはここでプレーしています。彼はあなたたちのチャンピオンです！」ジャマーがこのゲームで勝つたびに、観客たちの喝采が起き、彼は腕を高くあげてそれに応えた。多くの観客たちの前で、何度も自分が勝利して、叔父を見返すことができたのである。セラピストは、アナウンサーや観客など1人何役も演じながらセッションを進めていく。

このゲームは2-3ヶ月続いた。あるとき「インタビュー」の中で、アナウンサーが「視聴者の皆さんは、君がどうやって性虐待に対処してきたか知りたがっています」というと、ジャマーは、「里親とセラピストに、そのことを話すこと。学校ではけんかをしないで良い子になること。とにかく、前に進みつづけることさ。」と答えた。「番組」最後の、この「インタビュー」場面は、その後も何度も行われた。ジャマーは「視聴者」の子どもたちに、学校でちゃんとやっていく方法や、誰かに性的な行為をされそうになったらどうしたらよいか等についてアドバイスをした。これは、自分が自分のセラピストになるワークとも言えるが、「視聴者」を想定した「記者会見ドラマ」になっているところがとても良い。このときジャマーは、自分の叔父がしたことは間違ったことであり、虐待は自分が悪かったせいではないことなども語った。さらには、叔父さんの悪いところばかりでなく良いところも、そして両親を恋しく思う気持ちにも言及した。

セラピストと子どもの力

セラピストとジャマーは、ドラマセラピー開始から1年ほどが過ぎた時点で、ここまでのプロセスを創ることができた。同じ言動が繰り返されるジャマーのドラマを受容しながらともに歩むセラピストの忍耐強さ、時々セラピスト自身の気づきやジャマーの様子から得る鋭い洞察力、文字通り創造的な介入、遊べないもの（トラウマ）を遊びに変えるプレイフルネスなど、セラピストの多くの特質が発揮されている。単にドラマで遊ぶということを超えて、ドラマ内容をとてとても上手に利用しながら、そして被害を受けた子どもが、ヒーローとして他の子どもたちに教えるという形をとりながら、非常に難しい認知の修正と、憎しみだけではない加害者たちへ抱く複雑な感情表現も見事に実現させている。セラピストが素晴らしいのはもちろんであるが、そこには、当然クライアントである子どもの力も発揮されている。ジャマーはネグレクトを受けていた期間も長く、彼の「子守」をしていたのは、テレビやビデオゲームの攻撃的なキャラクターたちだったのではないかと推察されていたにもかかわらず、短期間で生きる力を示してくれた。

また、良い結果を引き出したことには、この「発展的変容」というアプローチも多いに貢献している。この手法では「プレイスペース」でのドラマや遊びの中に振り返りもすべて含ませる。（対象者が大人でもやり方は同じだ。）ジャマーのセラピーの場合は、ヒーローインタビューの中にクライアントのリフレクションを取り入れたのである。そして彼が8歳だということを考えると、セラピストの苦労は大きかったと思うが、ここまでの結果だけでも、その甲斐があったと言える。

* * * * *

さて、シャーリーはジャマーにさらに愛着を感じ始め、ほどなくして彼を正式に養子にしたいと申し出た。しかしジャマーは、しばらくその話を避けている様子だった。

その後ジャマーは、長くやり続けたこの目隠しゲームを突然、辞めたのである。そしてセラピーはついにクライマックスを迎える。

<次号へ続く>

文献：

James, M. Forrester, A. M. & Kim, K.C. (2005). Developmental Transformations in the Treatment of Sexually Abused Children. In Haen, C. & Weber, A. M. (Eds), Clinical Applications of Drama Therapy in Child and Adolescent Treatment. Taylor & Francis Group.